

とうげの茶屋

小川未明

青空文庫

とうげの、中ほごに、一けんなかの茶屋ちややがありました。町まちの方ほうからきて、あちらの村むらへいくものや、またあちらの村むらから、とうげを越こして、町まちの方ほうへ出ていくものは、この茶屋ちややで休やすんだのであります。

ここには、ただひとり、おじいさんが住すんでいました。男おとこながら、きれいにそうじをして、よく客きやくをもてなしました。お茶ちやをいれ、お菓子かしをだしたり、また酒さけを飲のむものには、あり合わせのさかなに、酒さけのかんをして、だしました。おじいさんは、女によう房ぼうに死しなれてから、もう長いことなが、こうしてひとりで、商しょう売ばいをしています。みんなから、親したまれ、ゆききに、ここへ立たち寄よるものが、多おほかったのであります。おじいさんは、いつも、ここにこして、だれ彼かれの差別さべつなく、客きやくをもてなしましたから、だれからも、

「おじいさん、おじいさん。」と、いわれていました。

おじいさんも、こうして、いそがしいときは、小ちひさなからだをくるくるさして、考かんえごとなど、するひまはありませんが、人ひとのこないときは、ただひとり、ぼんやりとして、店みせさきにすわっているのです。すると、いつとなしに、眠ねむ気けをもよおしていねむりをするのでした。

もつとも、だんだん年をとると、こうして、ひとりでじっとしているときは、目をあけても、ふさいでも、おなじように、いつも夢を見ているような、また、うつつでいるような、ちようど酒にでも酔っているときのような、気持ちになるのです。

おじいさんも、このごろ、こんなような日がつづきました。戸外は、秋日和で、空気がすんでいて、はるかかのもつとを通過する汽車の音が、よくきこえてきます。どこか、森で鳴く、鳥の音が、手にとるように、耳へとどきます。

おじいさんは、汽車の音がかすかになるまで、耳をすましていました。やがて、あちらの山の端を、海岸の方へまわるとみえて、一声汽笛が、高く空へひびくと、車が音がしだいかすかに消えていきます。

「もう、汽車の窓から、沖の白い浪が見えるだろう。」

おじいさんは、自分が、その車に乗っているような気でいました。

また、若い時分、山へ薪をとり、せがれをつれていって、ちようど出はじめたきのことをたくさんとつたことを思い出しました。あのときの、冷たい地面に漂う朽ちかけた葉の、なつかしい香りが、いまま鼻先です。帰ると、おばあさんも、まだ達者だったから、すぐなべへ入れて、火にかけました。

いま鳴く、鳥の声こえが、そのときのことを、しみじみと思おもい出ださせるのでした。

夢ゆめともなく、うつつともなく、おじいさんが、じつとして愉たのしい空想くうそうにふけつてい
と、朝あさ、この前まえを通とおつて町まちへ出でた村むらの人々ひとびとが、もう用ようをたしてもどるころともなるので
した。

この、のどかな、ゆつたりとした気持きもちちは、おじいさんと向むき合あう山やまも同おなじでありまし
た。黄きむらさき・紫あか・紅あかと、峰みねや谷たにが美うつくしく彩いろどられていました。そして、まんまんと、青あおく澄すみわ
たる空そらの下したで、静しずかに考かんがえ込こんでいるように見みえました。こうして、いい天てん気きのつづく後あと
には、冬ふゆを迎むかえるすさまじいあらしがくるのを、あらかじめ知しらぬのではないけれど、す
ぎし日ひの、春はるから夏なつへかけての、かがやかしかつた思おもい出でに、心こころを奪うばわれて、短みじい日ひぎし
のうつるのを忘わすれているのでした。まして、このとき、おじいさんと山やまの静しずかな心持こころもち
を破やぶるものは、なにひとつなかつたのです。

ところが、ある日ひ、こんなうわさが、茶屋ちややで休やすんだ村むらの人ひとから、おじいさんの耳みみへはい
りました。

「おじいさん、ここへ、このあいだ、あめ屋やさんが寄よつて、たいそう酔よつたというじやな
いか。」

「ああ、いい気持ちで、帰らした。」と、おじいさんは、にこにこして、答えました。「どうりで、きつねにばかされたつて。なんでも、一晩じゆう林の中で、明かさしたということだ。」

「えつ、あめ屋さんがかい。」と、おじいさんは、びつくりしました。

「町へいく道へ出ようと思つて、おなじ道をなんべんも、ぐるぐるまわっているうちに、目がさめると、西山の林の中で、寝ていたというこつた。」と、村の人はいいました。

そのとき、おじいさんは、あめ屋が、いい機嫌になつて、子供の時分のことなどを話して、

「この西の方の山へ、子供のころ、きのこをとりにきたことがあつた。」と、さもなつかしげに、あちらをながめて、あの山でなかつたか、いや、もうすこしこちらの山であつたとかいつていたのを思い出しました。酔つているので、しぜんと足が、その方へ向いたのかもしれない、そう、そのときのようにすを村人に話すと、

「なるほど、そんなことかもしれない。多分そうだろうよ。いまどき、きつねにばかされるなんて、まったくばかげた、おかしな話なものな。」

その村人も、そういつて、笑いました。

しかし、このきつねの話は、よほど誠しやかに、伝えられたものとみえ、その翌日だつたか、村の助役が、茶屋へ入つてくると、

「おじいさん、わるいきつねが出て、人を騒がすそうだが、ここでは、なにも変わったこととはないかね。」と、問いました。

おじいさんは、にこにこしながら、

「あめ屋さんが、ばかされたといいますが。」

「村の女どもも、町からの帰りに、ぶらさげてきた塩ぎけをとられたといっている。なんでも、後からついてきて、さらったものらしい。」

「それは、いつのことですか。」

「つい、二、三日前のことで、まだうす暗くなつたばかりのころだそうだ。」

そうきくと、おじいさんの目へ、二、三人の若い女れんが、ぺちやくちやとしゃべりながら、この家の前を通つた、姿が浮かびました。その中の一人は、背にさけをぶらさげていたが、からだをゆすつて笑うたびに、さけが、右へ、左へ、ぶらぶらと、振り子のようにならうごいて、途中で落ちなければいいがと、こちらから見ている、思つたのを記憶に呼びもどしました。

「これから、寒さむくなつて、えさがなくなると、どんないたずらをするかしれない。」

助役じやくは、こういつて、たばこに、火ひをつけました。

「どこか、道みちで落おとしたのでありませんか。」と、おじいさんは、いいました。

「なに、逃にげていくきつねのうしろ姿すがたを見たというから、ほんとうのことだろう。」と、助役じやくは、そう信しんじていました。

「おじいさん、きつねなんか、まあどうでもいいがね、それより、来年らいねんはこの前まえをバスが通とおるといふじやないか。」と、助役じやくは、あらたまつて、さもとおげさに、いいました。

「バスがで、ございますか。」

「まだ、知しらないとみえるな。そうしたら、いままでのように、歩あるくものがなくなるだろう。」

「歩あるくものが、なくなりましような。そうすれば、もう、この商しょう売ばいもどうなりますか。」

おじいさんは、力ちからなくいいました。

「世よの中なかが、便べん利りになれば、一方ほうに、いいこともあるし、一方ほうには、わるいこともある。しかし、そこは頭あたまの働はたらかせようだ。考かんえてみさつしやい。近ちかい他たの村むらから、みんなこの道みち

へ出てくるだろう。バスの停留場が、この家の前にも着くことに決まったものなら、この店はいくら繁昌するかしれないぜ。」

「そうでございましょうか。」と、おじいさんは、白髪頭をかしげて、あたりしくいれた茶を助役の前へ出しました。助役は茶わんをとり上げながら、

「それも、運動するのはいまのうち、早いほうがいいぜ。」といいました。

「運動するといいますが、なにぶん、この年寄りひとりではどこへも出られません。」と、おじいさんは、かしこまってすわり、ひぎの上で、しなびた手をこすっていました。

「なに、おまえさんがその気なら、代わって運動をしてもいい。」と、若い助役は、相手の心持ちを読みとろうと、鋭く、おじいさんの顔を見ました。

おじいさんは、心で、どうせそれには金があるだろう。いったい、いくらばかりあったら、その望みがかなえられるのかと、もじもじやっていました。

「いま、話をきいて、すぐといつても、分別もつくまいから、おじいさん、よく考えておかつしやい。」

そう、いいのこすと、助役は店を出ていきました。

おじいさんは、このころから、なにか新しい問題が、身に起こると、しきりに心

細そさを感じかんました。それは、年としのせいかもしれない。そして、遠とくはなれて一人ひとりの息子むすこのことを思うおもうのでした。いよいよ、いっしょになつて、頼たよろうかとも考かんえるのであります。

おじいさんは、客きやくがいなくなつて、ひとりになると、このあいだ、せがれがよこした、手紙てがみを出だして、見みていました。それにはそちらは、じき寒さむくなつて雪ゆきが降りふりますが、こちらちゆうえは冬ふゆもあたたかです。父ちゆうえ上えも、どうかこちらへいらして、親おやこ子こいっしょにお暮くらしくださいませんか。私わたしどもも、まだ子供こどものないうちに孝こうこう行こうしたいと思おもいます、というようなことが書かいてありました。たぶん、せがれが、工こうじょう場じょうの休やすみ時間じかんに書かいたものとみえ、工こうじょう場じょうの用よう箋せんが使つかつてありました。おじいさんは、それらの文字もじにじむ、親おやおも思いの情じようをうれしく、ありがたく感かんじ、手紙てがみをいたたくようにして、また仏ぶつだん壇だんのひきだしへしまいました。長なが年ねん苦く楽らくを共ともにした女にようぼう房ぼうが、また、せがれにはやさしかった母ははが、いまは霊れいとなつて、ここにはいり、なにかもじつと見みている気がして、おじいさんは花は生なげの水みずをかえ、かねをたたいて、つましく手てを合あわせました。

このとき、人ひとのきたけはいがしました。

「このごろは、めつきり、早はやく日ひが暮くれるのう。」

「素晴らしいながら入ったのは、年とった百姓でありました。」

「いま、町のもどりかの。」と、おじいさんは、親しげに迎えました。

百姓は、おじいさんのそばへ寄つて、腰を下ろしました。おじいさんのおし出す火鉢にあたつて、昔風の太いきせるに火をつけました。

二人は、小学校時代からの友だちでありました。ほかにも仲のよかつたものもあつたが、早く死んだり、あるいは、この土地になくなつたりして、この年となるまでつき合をし、たがいに身の上話を打ち明けるのは、わずかこの二人ぐらいのものであります。

「二本つけるかの。」

「それを、たのしみに、町で飲みたいのを我慢してきたわい。」

これを聞くと、おじいさんは、炉の中に松葉をたき、上から釣つた鉄びんをわかしかかりながら、

「来年から、この道をバスが通るといふこつた。それで、いまのうち、はやく前へ停留場の着くよう運動をしろと、さつき助役さんがいらしていわしたが、おまえも知るとおり、おらも、だんだん年をとるだし、いつそせがれの許へいったほうがいいかと

も考えてな。」と、しんみりとした調子で、語りました。

年とつた百姓は、下を向き、青い煙をただよわして、燃える火をじつと見て、きいていました。

「なにしろ、親ひとり、子ひとりだもの、いつしよに暮らすに越すことはない。だが、生まれたときから、住みなれた土地だもの、ここをはなれかねるおまえの心持ちはよくわかる。どっちでも、よく思案して、好きなようにするがいいぜ。しかし、この道をバスが通るので、商売が成り立たぬという心配なら、しないがいい。バスに乗る人はきまっている。毎日、荷を負つて、町へ出たり入ったりするものが、そんなものに乗れっこない。それに、雪が降れば、車など、通りたくても、通れっこない。ここは、冬のほうが休む人が多いんだから、先越し苦労をさっしやるな。停留場なんか、どこへ着いてもいいという気で、成り行きにまかしておかつしやい。また、どんなことがあると、おまえ一人ぐらい、わしらが、困らしはしない。」と、おじいさんをなぐさめました。

「このくらいで、かんはどうだろう?」

おじいさんが徳利を上げてつぐのを百姓はうけ、口へ入れて、首をかしげました。

「もうちつと、あつくするかい。」

「いや、ちょうどいい。ああ、おまえがいけるなら、いつしよにやりたいと、いつもおらあ、さんねんに思うだよ。」

「なあに、そうして、気持ちよく飲んでもらえれば、わしも酔ったように、うれしくなるぜ。」

二人は、親しく話しながら、開いている障子の間から、ほんのりと明るく暮れていく山の方をながめていました。

その翌日は、にわかには気が変わりました。朝のうちから木枯らしが吹きつのは、日中も人通りが、絶えたのです。おじいさんは早くから戸を閉めてしまいました。

まだ、外の空は、幾分明るかったけれど、家の内は、灯をつけると、夜の更けたごとく、しんとしました。このときトン、トン、と戸をたたたく音がしました。

おじいさんは、風の音だろうと、はじめは気にとめなかったが、つづいて、トン、トンと、音がきこえるので、だれかきたのだとさとりました。

ふと、きつねの出るうわさが、頭へ浮かんだので、おじいさんは、いつそう用心しながら、戸の方へ近づきました。

「なんのご用かな。」と、内から大きな声でききました。

「お閉めになったのを、すみません。」

そう、いったのは、やさしい女の声でした。おじいさんは、ますます、不審に思い、戸を細めに開けて、外をのぞきました。

すると、そこには、小さな男の子をつれた、まだ若い女の人が立っていました。ようすで、旅のものであるとわかります。

「もう、だれもこないと思ひまして、早くしめました。」

「すみません、お芋か、かきでも、なにかたべるものがありましたら。」と、女は、いいました。

「はい、ありますが。」と、おじいさんは、戸をからりとあけました。

「すこし入ってお休みなさつては。どちらへ、おいでなさるのですか。」と、おじいさんは、たずねました。

「この先の村へいくのですが、汽車がおくれて着きまして、それにはじめての土地なもので、聞き、聞き、まいりました。子供が、もう歩けないからというのを、なにかあつたら、買ってあげようといひ、いい、元氣づけてきました。」

おじいさんは、奥から、かきと芋を盆にのせて持つてきて女に渡し、別にゆでたくりを

一握り、それは、自分から子供の両手へ入れてやりながら、

「それは、それは、おたいぎのことです。ここから、もう一息のお骨おりですが、道はよろしゅうございます。それではすこしでもお早く、明るいうちに、いらつしやいまし。」
 といいました。そして、心では、だれか、村の青年で、他郷に家を持ったものの女房であろうと思ひました。

「お世話になりました。」と、女は、礼をいって、子供の手を引き、風の中をうす暗くならかけた道へ消えていきました。

しばらく、戸口に立つて、見送つていたおじいさんは自分にも、あちらでせがれの結婚した嫁のあることを思ひました。

「いつ、ああして、訪ねてこないものでもない。」

もし、そのとき、町から、村へ、バスが通つていたら、どんなになるか、便利なことであらう。そう、考えると、このときまで、頭の中にあつた、商売上のことや、一身の損得などということが一しゆんに落ち葉のごとく吹き飛んでしまつて、ただ世の中の明るくなるのが、なにより喜ばしいことであるように感じられ、また、多くの人たちがしあわせになるのを、真に心から望まれたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「たましいは生きている」桜井書店

1948（昭和23）年6月

初出：「新児童文化 第2冊」

1947（昭和22）年9月

※表題は底本では、「とうげの茶屋《ちやや》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

とうげの茶屋

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>